林檎停通信

NO.165　2018.2.20

〒399－8501　長野県北安曇郡松川村
E-mail: ringotei@cameo.plala.or.jp
町田　登・幸子

近年にはない寒い冬、皆様いかがお過ごしでしょうか。ここ安曇野は雪が少ないのですが、水道が凍ったり、孫たちがインフルエンザにかかったりと、この季節ならではの現象がありました。私はですが、りんごの樹の剪定作業を身体の調子と天候に合わせてなんとか終了させました。これからはりんごの樹の植え替え作業です。腐乱病やキツツキの被害で朽ち果てた樹に替えて、グラニースミスの種で育てた名もない品種とか、 あちらこちらに植えて接木しておいたものを定位置化するのです。リース会社からバックホーンを用立てての作業になりますが、これもまだ先があるのだという意気ごみというところです。

「いまここを生きて」ガンプ太田編を読んだ。安藤栄里子さんのメールや日記をまとめて本にされたものです。彼女はグアテマラの先住民族マヤの人たちの支援活動をしていた新聞記者だった。2005年に骨髄腫、余命2年と宣告された。闘病生活の苦しさは想像もできないが、細部にわたって記録されている治療内容などをみると、 それを絶する強さに私なんぞは涙が出てしまう。 8年半あー面白かったと死にたいと彼女は言っていたと言う。

留学先のアメリカでの核施設事故による内部被曝が原因らしいが、福島の人々の思いを寄せた彼女には表面的なつくろいはなかった。 何度か我が家へ顔を見せてくれたが、笑い顔がまぶしいほど愛しい栄里子さんだった。

「めがね」 大貫妙子

迷わずに鳥は海を渡る　あたたかな月は人を照らす　そして季節は色づき　この場所に立ち　風に吹かれよう　大地も人も愛しく　すべてがここにある　そして自由に生きている　私がここにいる　You live freely only by your readiness to die　悲しみの人に出会った時　私には何ができるのだろう　たったひとつのことだけ　あなたと並び海へと向かおう　　大地も人も愛しく　　すべてがここにある　そして自由に生きている　私がここにいる

栄里子さんは大貫妙子さんの詩が好きで、いつもかたわらに置いていた。この曲を聴きながら涙を流していたという。42才の生命だった。

私はグアテマラの状況にも無知であったので彼女に知らしめられたようなものだ。先住民アイヌの人たちへの思いを寄せながらでもだ。 歴史を学ぶことは未来を築くことだと中学生レベルの話しを今更ながら自分に問いかける。イギリスの産業革命は何を犠牲にして成立したのだろうか、自然の森の木をエネルギーにして力を貯え、世界各地を植民地化した。 阿片戦争も清国への侵略の道すじだ。人間のはかなさにつけこんで阿片と金でドロドロにした。古事記や日本書紀にドロドロの権力争いが語られている。弥生時代以後のことだ。権力者の代表である代替も、愛国心とやらを武器にして始まろうとしている。日々歴史をふりかえる余裕などないという大変な時代ではあるが、未来につなげる責務は誰にでもあるということを私たちは自覚しなければならないのだ。

私はりんご栽培者としてこれまで生きてきた。りんごの原産地はどこだろうか。 農薬はいつ頃から使用されるようになったのか。それは侵略と戦争が世界中にりんごを広げたという事実にぶつかる。日本へは北海道開拓使がアイヌ民族をおしつぶす中でアメリカから苗木を取りよせた。 それが

青森等へ広がった。もうだいぶ前になるが、司馬遼太郎の「北のまほろば」に青森の柏村に百歳を超えているりんごの木があると聞いて訪ねたとある一文を読んだ。農業関係の書物でないものにりんごのことが書かれることも珍しいが、先人の努力はいっぱい杖をついている樹を見れば誰にも理解できる、司馬さんのようにここから世界を広げていきたいものだと思った。

私はこの年齢になるまで外国へはほとんど行ったことがないと言える人だ。だから飛行機に初めて乗った時のことは今でもしっかりと記憶にある。その反動ではないが三里塚には何度か足を運んだ。空港反対同盟の戸村さんの家にはテープレコーダーを持ち込んで話しを聞いた。いつか軍事空港になるよの言葉が印象的だった。キリスト者のイサクから受けたという名前にも世界観が広がった。私の友人や周囲には、ネパール、インド、イギリス、フランス、イスラエル、オーストラリア、中国等へ行った人が多々いる。それらの人の話しをまとめると世界一周でもしたような気分になる。私たちの娘の旦那がトルコの人だ。彼等に地下都市は誰が作ったのだと問いたい。君たちはケルト人のことを知っているのかいと。 車の走行距離なら地球を何十回となく回っていることになるのだが残念ながら同じ風景しかない。これも自分が定めた小さな歴史観なのだ。

ボクだった頃の話しをしよう。祖母の姉が渋温泉という所にいた。ボクたちは渋のおばちゃんと呼んでいた。一年に何回か電車に乗って遊びに行っていた。 その度に温泉まんじゅうを出してくれた。家では畑からとったナスやキュウリだったからほんとうに嬉しかった。 すぐ近くに大浴場があった。湯治場だったからなのか作りは解放的だった。男湯と女湯の仕切りは板のつい立てのようなものだけで、湯をもぐると両方共に行ききできたのだ。近所の悪童たちがキャアキャアと騒いでいた。ひょっとして幸子ちゃんもそこにいたのかもしれない。昔の人はおおらかだったのだ。 ボクなどは始め桶の風呂で育ち、そのうち生活改善とやらでタイル張りの風呂となったが、 一週間に一度だけだった。おうーいぬるいぞと声がかかれば急いで薪を足した。中学になると町の4校合同の陸上競技大会や音楽会があった。温泉場の子供たちはあかぬけているなあという言葉を憶えた。おばちゃんの家は小さいながらも、油絵があったり、難しそうな医学書が並べてあったりして、はいからだった。うす暗い部屋と囲炉裏とかたむいたちゃぶだいと裸電球とあまりにも違い過ぎた。ある日おばちゃんがブラジルへ移民するという話しを聞いた。子供にはその理由を知らされなかった。ボクは本箱をいただいた。しっかり勉強しなさいと言われたが、漫画本が並んだだけだった。

あの頃はまだブラジルへの移民政策があったのです。誰にでもどこにでも、いつか別れがあるものです。今はおばちゃんの家は跡形もなく音信不通になったままだ。 ブラジルで幸福になっていたのかなあと、我が家の台所においてある黒い本箱を見るとたまに思い出す。

ふじとグラニースミスまだあります。ジュースもたくさんできました。お求め下さい。
今日、税務署へ申告を済ませました。毎年これは幸子さんの担当です。帰ってきてからの開口いちばんですが、8月までは収入がないのだから、ジュースの営業をしてくださいよねだった。

「まほろば」とは司馬さんの説明だと、 日本に稲作農業がほぼひろがったかと思われる古代、大和を故郷にしていたとある。そしてまろやかな盆地で、まわりが山波にかこまれ、物成がよく気持ちのいい野、と理解したいとある。

北の札幌のまほろばという自然食品の店に、私たちのりんごとジュースが飛行機に運ばれて届けてあります。 そこの社長さんからグラニースミスを植えたいという報告があった。 楽しみですね。皆さん、電車でも、車でも飛行機でもいいですから、あそびに来て下さい。 お待ちしております。